

★**身体論**

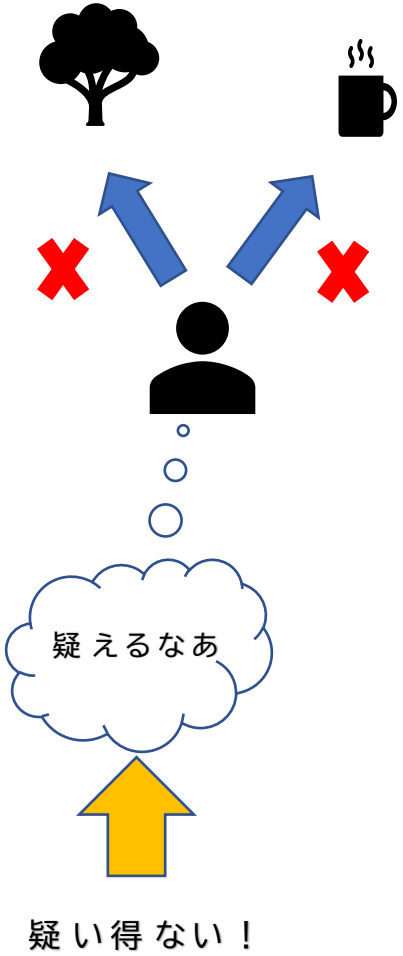
— 身体は精神より劣っているか —

身体論は評論の重要テーマの一つです。身体は自分のものはずなのに、自分でさえよく分かっていないものでもあります。また、身体は精神（心）としばしば対比されて出題されます。さらに、言語論ともミックスされて出題されることもあります。

まず始めに、**心身二元論**をみていきましょう。私たちもよく「身体から魂が抜けて〜」等と言ったりしますが、この感覚に近いのが心身二元論です。すなわち、人間を精神（心）と身体の二つに分けて考える考え方です。

世界の至る所で、古来よりこの心身二元論的な考え方がなされてきましたが、それをより哲学的に厳密化したのがデカルトという人です。

デカルトは、世界のありとあらゆるものを疑ってかかりました（**方法的懐疑**）。目の前の景色は錯覚かもしれない。触れている物も錯覚かもしれない。こうして疑いに疑った挙句、ついに疑うことができないものに出くわします。それは、「すべてを疑っている精神だけは、確実に存在している」というものでした。これが有名な「我思う、故に我あり」という**哲学の第一原理**です。

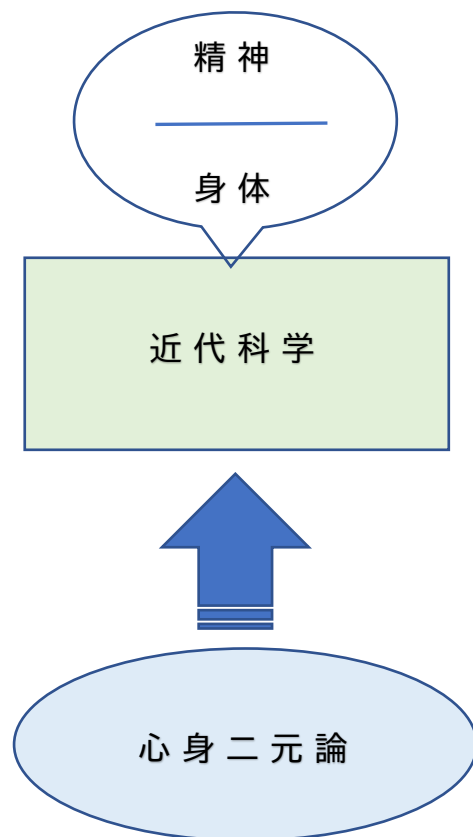


当サイトはこちらよりご覧になれます。



デカルトの哲学の第一原理によると、「私」＝「精神」となりそうです。「私」という存在は、物事を疑う「精神」そのものだ。そこから心身二元論の考えが発展して、近代科学の思想へとつながっていきます。その中で、いつの間にか精神と対置される「身体」の重要性が置き去りにされてしまします。

「身体」は単なる物質であり、操作できるもの。この思想が近代科学、とりわけ医療の分野の飛躍的な発展をもたらしたのは言うまでもありません。しかし、精神を優位に据えて身体を劣位に置く、この**二項対立**による物の見方は、本来重要な役割を果たす「身体」の性質から目を背けたものでした。



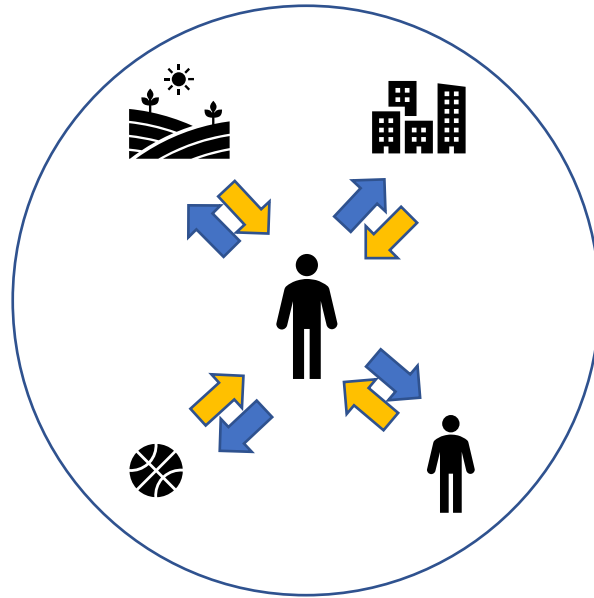
◎ 評論 キーワード

- ・ **心身二元論**…人間を精神と身体の二つに分けて捉えること。**物心二元論**とも。
- ・ **方法的懐疑**…デカルトの行った、あらゆる物事を疑う哲学的態度。
- ・ **哲学の第一原理**…「我思う、故に我あり」。方法的懐疑によつて導かれた、疑い得ないもの。
- ・ **二項対立**…二つの概念が矛盾または対立関係にあること。

身体の見直しを図った一人にメルロ・ポンティという人がいます。身体は外界に触れ、また触れられるという性質を持ちます。言い換えると、身体は外界に働きかける**主体**でもあり、外界から触れられる**客体**でもある、**両義性**を持ったものなのです。

例えば、相手が泣くところからも泣きたくなったり、スポーツ観戦していたら熱中して全身を使って応援していたりするように、身体は動く主体でもあり、動かされる客体でもあるのです。

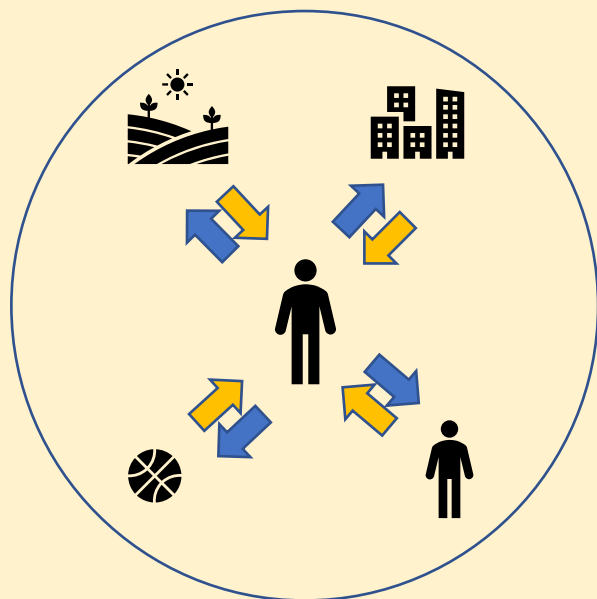
私たちはそのような「身体」を通して世界を**知覚**しています。「身体」があつてはじめて、私たちは世界と関われるのです。このように考えると、「精神」＝「私（主体）」という考えは否定されます。何よりもまず、身体があつて世界と関われるのです。そしてその「身体」は主体でもあり、客体でもあるのです。



世界と「私」は
「身体」を通してつながる。

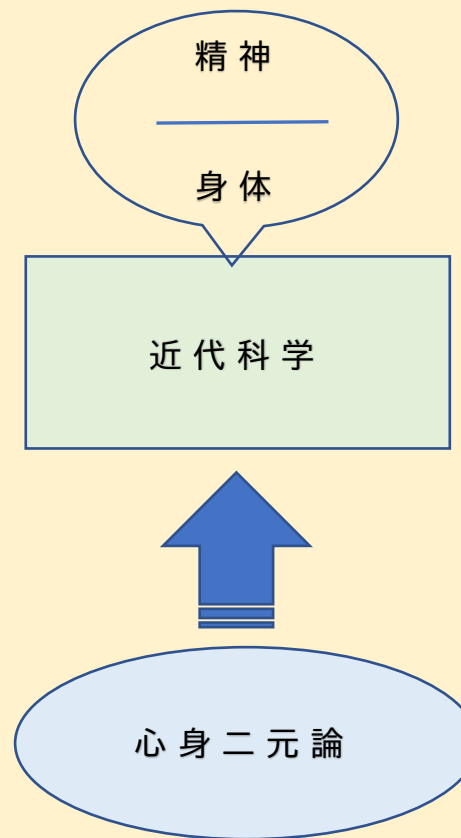
◎ 評論 キーワード

- ・ **主体**…行為や作用を他に及ぼすもの。多義語は「**客体**」。
- ・ **両義性**…一つの事柄が相反する二つの意味を持っていること。
- ・ **知覚**…外界から感じ取った刺激に意味づけすること。



世界と「私」は
「身体」を通してつながる。

●人間は「身体」を通して世界とつながる存在！



●心身二元論は科学を発達させ、身体を置き去りにした！